

# ボランティアの本質と認識に関する考察

是枝 貴志

北九州大学文学部人間関係学科

## 要旨

本論文では、ボランティアに初めて関わることになった「私」の事例を紹介しながら、ボランティアの認識について考察した。

「ボランティアとは何なのか」「なぜボランティアをするのか」という問いは自身のボランティア観が確立していなければ答えることは難しいものである。しかし、実際にはボランティア観など確立せずともボランティアをすることはできる。

社会の変化につれて、ボランティアの在り方も大きく変わってきているのが現状であり、1995年の阪神・淡路大震災は、ボランティアへの社会的な再考につながったといえるだろう。その社会的な再考は、今のボランティアを考える上では重要であろう。

そこで現代におけるボランティアの実状をまとめてみた。その結果から、ボランティアは自発性を本質とする社会に開かれたさまざまな活動であるということがわかってきた。ボランティアを奉仕と捉えがちな日本では、同時にボランティア=善行という意識が出来上がっている。しかし、ボランティアが「偽善だ」と言われるも実はそこにある。周囲からの評価が後から付随し、本質を曇らせているのだ。

結論として、ボランティアの本質は自発性の結果として「精神的充足=自己満足」をもとめるものであると私は考える。

## 目次

序章 島で出会ったボランティア	
第一章 「ボランティア」として見ていたボランティア	
第一節 子ども劇場という「ボランティア」	
第二節 「ボランティア」をのぞいてみて	
第三節 スパイの活動事例	
第二章 外から中へ	
第一節 実行委員になって	
第二節 それぞれのボランティアの捉え方	
第三章 「戦前、戦後の日本社会におけるボランティアとその背景」	
第四章 「現代社会におけるボランティアの意味と位置づけ」	
第五章 「私の感じたボランティアというもの」	
まとめ	

## 序論 島で出会ったボランティア

私は島の名前に惹かれて宝島という島を訪れた。宝島は、鹿児島県の南の海に浮かぶ南北16.2kmにわたるトカラ列島の最南部に位置する。面積7.14平方キロメー

トル、人口約100人、鹿児島港からの所要時間14時間10分で、サンゴ礁が隆起してできた島である。島内のいたるところに鍾乳洞の入り口があり、海賊キャプテン・キッドの財宝が隠されているのではな

いかと言われたこともある（十島村役場、1995、78 - 84）。

その宝島での滞在中に「子ども劇場」という団体に出会った。彼らは70人という大人数でキャンプに来ていた。よくある親子サークルのようにも見えた。しかしよく見ると親子ではなく、異年齢集団であった。片道だけで、船で半日以上もかかるこんなところによくきたものである。幼稚園ぐらいの子どもを見ながら、世話の大変さを想像した。しかし、私には関係ないことなので単に傍観するのみであった。島に滞在して2日目、台風がやってきた。体育館の軒下で野宿をしていた私は少し気持ちが高ぶっていた。台風という非日常的な状況を楽しむつもりだったのだ。

しかし、楽しかったのは最初だけで、これから更に強まるであろう猛威をどう凌ぐかに頭を悩ますばかりであった。そこへ、子ども劇場の人達がやってきた。彼らは体育館を開放してもらい避難するのだという。私は一緒に避難させてもらうことになった。体育館の中で子ども達と仲良くなり、「子ども劇場」というものが何であるか子どもから聞き出した。「みんなで劇見たり、クリスマス会したり、キャンプしたりするんだよ。」子どものひとりがそう教えてくれた。そこで聞いた内容と見た感じから、私はボランティアという言葉に連想した。これはいわゆる、ボーイスカウトのようなものであるのか。世話をする人される人に分けてその団体を見ていた。これはボランティア

になるのだろう。子どものために奉仕する人がいる。

この時、私が興味を持ったのは別の所にあった。それは彼らのキャンプが9泊10日であり、半日もかけてわざわざこの島に来たことである。ここは小さな子どもをたくさん連れてキャンプをするには危険な場所ではないだろうか。台風で一週間以上交通が絶たれることや、ハブが生息することなどを考慮するとそう思えてならなかった。また、子どもの頃に同じ小・中学校の同じ学年以外に友人のいなかった私にとって、異年齢キャンプというものはうらやましいとも思えた。

これをきっかけとして、子ども劇場へと関わっていくことになるのである。そして、私はこの中でボランティア活動というものを考えるようになった。この論文では私自身がボランティアをする中で、ボランティアに対する考えの変化を事例としてあげていくこととする。

その過程で「私はなぜ自分がやっていることをボランティア活動だと感じなくなったのか」「深く考えずボランティアという言葉を使っているが実体はどうなのか」という疑問が生じた。

これらの体験と、文献による近年の日本のボランティア観の変化、現代的ボランティアの捉え方から、ボランティアとは何であるかを明らかにしたい。

## 第一章 「ボランティア」として見ていたボランティア

私はこれまでボランティアらしいボランティアをしたことがなかった。何かをするにはそれに対する見返りがなくてはダメだと思っていた。タダですることが前提というのは損するだけである。むろん、ボランティアというものは存在し、活動している人がいる。いわゆる「いい人」がやっているのだろうと思っていた。もしかすると彼らはいい人どころか、ただ知らずに誰かに利用されているだけなのかもしれないとまで思っていた。

実際には金を払ってやってもらうことなのに、タダなのだから使わない手はないと考え、ボランティアを利用する人もいるだろう。ボランティアを提供する側として考えても、同じ事をしてもバイトになる場合だってある。金は要らないとタダ働きをするのだからやはり生活に余裕のある人なのだろう。これは、暇だからバイトをするというのと似た感覚なのではないか。

このように、ボランティアという行為は私としては理解できないものであった。続けている人はなぜ続けているのか。他にもっとすべきことがあるのではないか。そう思えてならなかった。

ボランティアは「誰かの役に立ちたいという理想」と、「役に立ったという自己満足」にすぎず、なにか世の中に貢献しているように思うことによって、社会的自信がつくものなのかもしれない。時にはあまり

取り柄のない人間の逃げ場だったりする場合もあるのではないか。またビジネスという点からボランティアを考えると、それは無給の労働者として重宝される。労働の内容と募集の表現によるが、ボランティアと称すればある程度は集まるだろう。非常に便利な存在である。しかも、これがボランティアをしている本人の自己満足につながれば、なんら問題はない。

ボランティアをしたことのない私は、ボランティアをする人がその活動を続けるのは「しょうがないなぁ」という愛着と惰性的な責任感が原因ではないかと考えていた。ちょうど出来の悪い恋人と長く付き合っている状態ともいえようか。

## 第一節 子ども劇場という「ボランティア」

私は宝島から北九州に戻ってきて、小倉にも子ども劇場があることを知った。

鹿児島市子ども劇場連絡会の案内にはこうある。

「子ども劇場は（子どもに夢と豊かな創造性を育む）ための文化団体です。生の舞台芸術鑑賞（例会活動）と、子どもたちの友情と自主性をはぐくむための自主的な活動（自主活動）を二つの柱にしながら、子どもたちの健全な成長をめざしています。

### 例会活動

優れた生の芸術は子ども時代の豊かな感性を育みます。

舞台劇、人形劇、音楽、芸能など

## 自主活動

地域にいっぱいのもだちづくり  
キャンプ、あそび会、素泊まり、子ども  
まつりなど

子ども劇場に入るには・・・  
いつでもだれでも入会できます。

4才からは会費が必要です(0才から参加  
できます)。

おとなも子どもも同額です。

子ども劇場は、会員一人ひとりが主人  
公です。

みんなで会費を出し合ってみんなの知恵  
を集めて魅力的な活動を続けています。」  
(鹿児島市子ども劇場連絡会、1999)

第三者である私にとって、子ども劇場で  
子どもの世話をしている人々は「ボラン  
ティア」であった。

「お金を受け取らないサービスである」

「暇だからやっている」

「専門的知識や経験があまり必要のない、  
誰にでも出来そうな活動である」

「地域的、近所付き合い的なものである」

「奉仕的な活動であり、提供者と受益者に  
分かれる」

私は「ボランティア」というものの在り  
方をこのように考えていた。この考えの中  
に偏見があるかもしれないとは自身でも感  
じていた。そもそもボランティアの外側し  
か見ていないのだから、仕方がない。しか  
し、「ボランティア」=タダ働きという考え  
は日本人の多くに根付いているのではない

か。日本においては、むしろタダ働きにボ  
ランティアを当てはめているだけかもしれ  
ない。

サービスというものは、大半がギブアンド  
テイクで成り立っている。資本主義国家  
である日本では、労働というサービスは賃  
金という報酬があって成立するものである  
から、無賃金を特色とするボランティアは、  
資本制の常識を否定するものとなる。それ  
は、私にとっては労働奉仕という名のきれ  
いごとにすぎなかった。子ども劇場の入会  
のしおりを見たり、子ども劇場関係者の話  
を聞いたりすると、子ども劇場もそうした  
「ボランティア=無料奉仕」に含まれるの  
だろうと思った。

しかし、子ども相手ということもあり、  
自称子ども好きの私としてはやってみたい  
ことでもあった。彼らはなぜこういった活  
動を続けているのか。異年齢集団としても  
興味深いし、なにより卒論を書くためとい  
うのが良いきっかけであった。「ボラン  
ティア」がしたいというよりは子どもと少し  
関わってみたいと思ったのである。

「こんな活動をするよりもっとすべきこ  
とがあるのではないか。他人の世話も良い  
が自分の世話はちゃんとできているのか」  
などと、うさんくさく感じながらも中で実  
際に触れてみることにしたのであった。

## 第二節 「ボランティア」をのぞいてみて

1999年3月、私は小倉北子ども劇場

の青年部に入会することになった。青年部は約45人の高校生、専門・短大・大学生、社会人から構成されており、そのほとんどの人が10年以上続けている。よってほぼ全員が幼なじみなのだ。誰も敬語を使用しないので、当初はかなり困惑した。二人の人間が話しているのを聞いていると、その関係は言葉に出てくるものである。敬語を使うということは、相手が地位的、年齢的など何らかの形で上の人間ということである。初めてたくさんの青年達に囲まれたとき、敬語を使って話している人は誰もいなかった。敬語を使っていたのは私だけである。相手が年上かどうかで言葉づかいを変えていた自分が恥ずかしかった。彼らの中では敬語を使わないが普通なのだ。家族に近いものがあるのかもしれない。敬語を使う私は完全に浮き上がっていたのでなるべく敬語を使わないようにした。たいして親しくもない段階で、年上相手に敬語を使わず話すのには非常に神経を使った。怒り出すのではないかと危惧しながら話したものだ。だが、実際には敬語で話すほうが嫌がられるのである。

入会したての頃の私は、ただ「いるだけ」の存在であった。話し合い等に行っても聞いているだけで、話を振られても返事をするばかりであった。ぼんやり話を聞きながら、全体を眺めていると「ボランティア」という言葉が頭に浮かんだ。うさんくさく感じていた「ボランティア」が目の前に広がり、私はその一角にいる。しかし、一角

にいるといっても私はスパイのようなものである。卒論を書きに来たと言っても過言ではない。「ボランティア」をするために来たのではなく「調査」をするために来たのだ。みんなを騙していると思えば後ろめたさを感じながらも、私はそのことを告げず何食わぬ顔で接していた。

### 第三節 スパイの活動事例

北九州市の子ども劇場全体のイベントとして、5月5日子どもの日に「皿倉山わいわい子ども祭り」というイベントが行われた。このイベントがあることを知った私は、即座に「これは卒論に使える事例になるかもしれない」と思った。参加は自由なのだが、私は卒論のために参加することにした。

そこでは子どもと一緒にダンボールの砦を作るのが役割であったが、私はあまり子どもの相手はしていなかった。一人で大きな砦を作ることに夢中になっていたのだ。しかしこれでは「子どもと一緒に」ということにはならないので、子どもに作業を手伝ってもらうことにした。そして、あまり意味のないところにガムテープを貼る子どもを見ながら、とりあえず「ありがとう。もっと大きくしようね」などと言ってみるのであった。この時は本当に作業に熱中していたため、子どもにそれほど構ってやれる余裕がなかった。それからしばらくして、「卒論の材料集め」という重要な仕事を思い出し、あたりを見回した。無邪気に遊ぶ

子ども、それを見ているだけの子ども、子どものようにしゃいでいる青年、子どもに振り回されている青年。そこで気づいたのは青年同士が人見知りをしていることだった。お互いになかなか話しかけようと思わない。ここには、小倉北・南、八幡東・西、門司、戸畑、若松の青年が一度に集まっているのだが、参加が悪く、全員で25人ほどであった。各劇場から5人に1人が参加する程度となる。子どもとは仲良くしようとするのに、青年同士が人見知りをしてしまうのは少し不思議であった。このように、私は暇があるごとに周りを観察しながら「ボランティア」をしていたのである。

入会から2ヶ月が過ぎた。子どもバザー、子ども祭り、例会などのイベントを経験し、子ども劇場の仕事に慣れてきてはいるのだが、まだまだスパイという立場であった。それは、卒論のために参加しているという気持ちが強かったからである。

やがて子ども劇場の活動のメインである子どもキャンプが始まった。青年は、青年同士の話し合い、親の集まり、子どもの集まりなどになるべく参加しなければならないため、かなり忙しくなると聞かされていた。しかし、卒論の題材として多くの情報を得るためには好都合であると考え、実行委員という班長のような役目を引き受けた。初参加となる私が実行委員になれたのにはわけがある。新人の私よりふさわしい青年はたくさんいた。しかし、学校、仕事、バイトなどで忙しく集まりにほぼすべて参加

できる者があまりいなかったのである。実行委員は話し合いの中心となるため、特に集まりへの参加が求められる。そこで暇そうな私に話が来たのである。そして私は、これを利用しない手はないと考えたのであった。

## 第二章 外から中へ

こうして、私は子どもキャンプの実行委員となった。青年9名子ども16名の班の代表である。

子どもキャンプは子ども劇場の自治活動の集大成である。毎年、キャンプを実施するにあたり、自主的・自治的活動の意義を学び、「なぜキャンプをするのか」を確認しながら進められる。場所選びから、今年の実目的・テーマまでを青年達で話し合い、実行委員体制をスタートさせる。年齢で区切るのではなく、すべての年齢層で構成する異年齢集団の中でつくられる豊かな人間関係づくりを軸に小学生・中学生・高校生・専門学校生・短大生・大学生・社会人をつくりあげていく。遊び、歌、ダンス、キャンプ技術を継承させつつ、新しい遊びも創造されている(馬場、1996, 209)。

これは私にとって大きな転機であった。

これまでの私は、子ども劇場に溶け込んではいなかった。受け身的な関わりであり、第三者的な存在として距離を置き「ボランティア」をしていたのだ。いい経験になるとも思っていたが、仕方なくやっている部

分があった。このときもまだ、私は「ボランティア＝奉仕」をしているつもりでいたのである。客観的に見ながらも、青年達と同じく子どものために奉仕をしていたのだから。

## 第一節 実行委員になって

実行委員になってからの私は卒論のことよりも班のことを考えるようになった。まだ出来上がっていない人間関係やほとんどないキャンプ技術、私からしてみれば他の青年はプロといってもいいぐらい慣れている。その中で実行委員をするのは気が引け、不安だった。さらに私の場合は子ども劇場自体初めてであるから、すべての子どもが初対面であった。顔見知りの子がいないため、うまく子どもとコミュニケーションが取れるかという問題もあった。これは自分だけの問題ではなかったので、卒論を一時置いて役割に打ち込んだ。実行委員会に全体指導員会議、班の指導員会議、親の会、子どもの集まりなどすべてに参加した。班から求められる実行委員としての役目を果たすなかで、自分が第三者ではなく、だんだん当事者に近づいているのがわかってくるようになった。深く関わり始めたことによって「ボランティア」の中に入りだしたのある。そしてこのときは実行委員としての責任感で動いていた。卒論という動機から移行したのであった。

## 第二節 それぞれのボランティアの捉え方

何度も活動に参加し、顔を合わせていると、今まで気づけなかった青年達の姿が見えてきた。彼らの中には子どもと話すのが苦手な者、子どもが嫌いな者が存在していた。子どもと話せない者は2人（男性）おり、そのことは実行委員会でも問題になった。彼らは人付き合いが下手なタイプで、子どものころからそうであった。子ども嫌いであった者（女性）も、ずっと以前からそうだったようだ。なぜそんな人が活動を続けているのかと私は不思議に思った。子どもが嫌いなのであれば、最初から子ども劇場には入らなければよいのではないが。それでも彼らが活動続ける理由は、彼らが青年からではなく親に連れられて、子どものころから子ども劇場に参加し続けていたからであった。彼らは物心ついたころから子ども劇場にいたので、意思をもって入会したのではない。高校生からは青年という面倒を見る立場へとなるのだが、そのとき辞めることもできたはずである。しかし続けるということは、やはり何か失いがたい何かがあるのだろう。

私は、幼なじみの集団としてみんなと離れたくなかったのが原因ではないかと考えた。実際に聞いても、同様の回答が得られた。しかし、彼らが活動の中で与えるもの以上に何かを得ている、というもうひとつの理由が存在することには、そのときの私はまだ気づいていなかった。このことは、

私に対する回答の中では「楽しいから」の一言で表現されていたのである。

さて、実行委員会で問題になった2人についてであるが、私も実行委員であるからその話し合いに参加していた。子ども嫌いの彼女については嫌いなりにも、周りから見ているそれがわからないぐらい子どもの面倒を見るのでそのときは問題にならなかったが、子どもと話すのが苦手という2人の男性は指導員として致命的である。

問題の2人は、周りの子どもが気を使っ  
てしまい、楽しめなくなるとの理由から指導員として自覚が足りないと非難された。熱心に活動している者ほど彼らを否定的に捉えていた。しかし、一方で子どもが一番であるのは言うまでもないが、だからといって、彼らに子どもと仲良くするのを強制するのもよくないという意見も出た。こうして強制派と許容派に分かれ議論となった。ここで二つに分かれた決め手はポリシー、スタンスがボランティア的であるかないかに起因すると私は考えた。心構えの部分での違いである。熱心な者には自分と異なるスタンス、つまり、彼らにとって努力が足りないと判断される動きが受け入れにくいようであった。熱心な者からは奉仕的な姿勢がうかがえた。問題になっている2人は当然熱心な方ではない。

結局、議論の結論としては軽く促す程度に求めるということになった。彼らは生き方としても、ずっとそういうスタンスでや  
ってきているのだから、それをねじ曲げて

しまうようなことはするべきではないということである。

では、問題となっている2人も「ボランティア」をしているといえるだろうか。熱心に活動をしている者と比べたらこなす仕事の量は当然少ない。しかし、出来る範囲でやっているという面では一緒なのかもしれない。そう考えると、彼らも彼らなりにボランティアをしていると言えるだろう。嫌なら辞めればいいのである。辞めないということはそれだけの意思はあるのだ。

それでは、私はどうだろうか。責任感により義務的に「ボランティア」をしていたわけなのだが、活動を続けるうちに自分がなにをしているのかわからなくなってきていた。果たして「ボランティア」をやっているのだろうか。「奉仕」している気持ちはまったくなかった。子どもと遊んでいるだけだ。私は、実行委員になり役割がたかさんできたことで、今までなかった子ども劇場での自分の居場所を作り上げたのだ。そしていつのまにか楽しく感じだし、好きでやっているのであった。義務感や卒論という意識もなくなっていた。やがて自分で「ボランティア」という言葉を使うことにためらいがでるようになりだしたのである。

子ども劇場で何をしているかを友人に説明するときなど、「ボランティア」という言葉を使わずに説明しても、相手は「ボランティア」という結論に行き着いてしまうことがほとんどであった。「ボランティア」をしているつもりはないのに「ボランティア」



と呼ばれてしまうのは少し不快であった。実際に活動している私はそうは思わないのに、やっていない人にとっては「ボランティア」の一言で解釈されてしまうのである。そうではないと説明するほど頭の中が整理できていなかったの、言い返すことが出来ずはがゆかった。活動を続けるうちにますます「ボランティア」をしているのではないという気持ちは強くなっていった。

ここまでは私の偏見を交えた一つの体験を事例として、私の意識の中でのボランティア観の変化を順次追いながら記したものである。このことを踏まえて、次に日本のボランティア観の変遷と、現代的ボランティアの解釈について考察したい。

### 第三章「戦前、戦後の日本社会におけるボランティアとその背景」

以下、日本のボランティア活動をめぐる動きと、時代ごとのボランティア観の違いを分析し、現代のボランティアの形成を考えたい。

日本でボランティアという言葉が初めて紹介されたのは、明治後期または大正期であると言われている。しかし長い間、一部の専門家が知るのみで、一般の人々に普及したのは戦後、それも1970年代以降のことであった。

永によると、戦前、日本では仏教を中心とした慈善事業の歴史があった。奈良時代の「保」の制度から江戸時代の長屋生活、

戦前のとなり組、冠婚葬祭など近隣相互扶助組織として成立していた。言い換えると、日本は昔からボランティア社会であったと言えるのである。永は、「そこへ改めてボランティアという言葉が登場してきたものだから、ぎこちなくなってしまった」(永、1997, 19)と述べている。すなわち、ボランティアという言葉が普及する以前の方が、本質的にボランティアが理解されていたのかもしれない。

日本のボランティアの源流とも言えるセツルメントは、大正から昭和初期にかけて多く設立された。マハヤナ学園、興望館セツルメント、東京帝国大学セツルメントなどがそうである。しかし、1931年に満州事変が勃発し、日に日に戦争の影が濃くなると、帝大セツルメントは閉鎖を余儀なくされた。民間社会事業もすべて戦争遂行の目的の中に吸収されていった。そして、ファシズムのもとに、自由意志によるボランティア活動は抑圧され、大政翼賛運動あるいは動員型の勤労奉仕活動一色になっていったのである。

戦後の復興期は、ボランティア活動の萌芽期とも言える。共同基金活動(1947)、赤十字奉仕団(1948)が始まり、ボランティアが活躍した。また、学生セツルメントの復活などの青年層によるボランティア活動も盛り上がりを見せた。しかし、一方で、この時期、社会福祉分野ではボランティアが急速に衰退していったのである。

戦後、占領軍によって示された「公私社

会福祉分離の原則」に基づき、日本国憲法 89 条では、宗教団体とともに公の支配に属さない民間社会福祉団体への公的助成を禁じた。これは戦時下の日本政府が、ボランティアな宗教、教育、福祉などの活動を「官民一体」の体制下に管理して戦争遂行という国家目的に利用したことから、占領当局が非軍事化・民主化という占領目的から強く進めたものである。また、当時のアメリカ人にとって、民間団体は財政的にも政府から独立しているのは当たり前であったためでもある（早瀬、1997, 22）。

ところが、日本ではその後この公的資金助成の禁止によって、民間福祉団体が深刻な財政危機に陥ったため、社会福祉事業法に「社会福祉法人」の規定を設け、設立認可、定款の変更などの公的な規制条項を定めた。これにより、社会福祉法人は公の支配に属するものとされ、公的助成が行われるようになったのである。このような経緯の結果、社会福祉法人となった民間福祉団体の大半は、財政的に安定する一方で、政府から強い指導・監督を受けることになり、ボランティアは衰退していったのである。このように、「社会福祉はすべて国の責任である」という考え方が広がった。このことについて、早瀬は「ボランティア活動は時代遅れ、あるいは国や地方自治体の責任転嫁を招くという否定的な捉え方が広がったわけである」と述べている。（早瀬、1997, 24 - 25）。この捉え方は今も日本人の多くに根づいていると考えられる。そし

てこれから先もボランティアは曖昧な捉え方をされることが多いまま、時代の共通認識として否定的に捉えられていくのである。

また「援助を求める人の中には、権利として要求できる行政のサービスを得たい、もしくは顧客として企業のサービスを受けたいと考えながら現実的にそれができない場合がある。そこで仕方なくボランティアセンターに相談に行くのである」と早瀬は述べている。（早瀬、1997, 14）。これも先ほどの否定的な捉え方の一例といえるのではないだろうか。本当はボランティアによる援助を望んでいないのである。すると行政の隙間を埋める役割としてボランティアが限定されてしまうのだ。以後、長らく日本社会におけるボランティア活動の広がりを阻害する一因となったのである。

1970年代、障害者グループの運動が、善意ではあるが社会性や人権意識に乏しいボランティア活動を強く批判した。障害者運動からの問題提起を受けて、ボランティアやボランティア推進団体の中で、改めて従来の慈善的・善意の活動イメージを払拭し、市民運動の理念ともつながるようなボランティア像を確認する動きが出てきた。人権の擁護や自治の精神を重視する社会性をもった活動であるという認識の確認である。この時期、ボランティアの表現として「ために（FOR）ではなく、ともに（WITH）」という言葉がよく使われている。これはこうしたボランティア観の変化をよく表していると言えよう。

しかし、1970年代後半からボランティア活動は次第に影が薄くなり始める。ボランティア組織や団体の中では盛んであったが、一般家庭や地域、学校では意識が衰退していったのである。その原因として、中川は2つの要因を挙げている。まず第一に、精神の欠如である。家庭や学校での教育ではうわべだけの道徳的、倫理的基盤ばかりで、国民の間にボランティア精神は育成されなかったのだ。むしろ自由が重視され、自分さえよければいいという風潮が蔓延してきたのであった。次に家族機能の解体と地域社会の崩壊である。高度経済成長とともに大都市への人工集中と核家族化が進み、さらに個人主義の拡大もあったため地縁や血縁に基づく昔ながらの助け合いは急速に縮小していった(中川、2000、7-8)。社会の変化に伴い、人々の意識や価値観も変化するのである。ここでは、それがボランティア精神の衰退につながっている。しかし現代では、逆にこの二つの原因を回復させる手段としてボランティアが用いられることもある。

1990年まで、日本は2度のオイルショックを経験しながらも経済的には順調に成長していた。しかし、政・官・財界をあげての独善的な商法により、諸外国から日本は批判を受けることになった。またアメリカを初めとする諸外国からの圧力に屈して、日本のODA(政府開発援助)の総額は1991年から世界一を誇っている。さらに1992年には、PKO(国連平和維

持活動)に協力して巨額の援助をし、自衛隊がカンボジアに派遣された。けれども十分な国民的議論もないままこうした理念に乏しい援助が行なわれたため、批判的なイメージを改善するどころか、かえって日本は「顔のない国」と言われるようになった。一方では、仕事の性格上、本来特にボランティア精神を求められる政治家や官僚、医療職や教師、警察官などのモラルの低下がしばしば指摘されだしたのである。

近年、少子・高齢化の急速な進展から、社会保障費の増大による国家経済の圧迫が深刻な国家的課題となっている。1994年に発表された「21世紀福祉ビジョン」では、自助・共助・公助ということが強調されている。これは社会保障費の不足を補うための政治的意図から、主として福祉分野でのボランティア活動が推奨されることを示している。行政主導のボランティア活動という一見矛盾したことをしようというのである。これについてはまた後ほど触れることにする。

1995年1月17日午前5時46分に起きた阪神・淡路大震災では、数多くのボランティアや団体などが多様な活動を展開し、わが国においてボランティア活動が一躍クローズアップされた。動きの遅い行政に対し、ボランティアの人々は軽いフットワークで縦横無尽に活躍したのである。その取り組みはわが国における「ボランティア元年」「ボランティア革命」とも表せられるほどのものであり、日本でボランティア

活動が改めて大きく浮かび上がったのであった。この時のボランティアのパワーと活動の意味は、人々のボランティア意識を喚起させるものとなった。その一方で、今後どうすればボランティア活動を発展させることができるのかという課題も浮き彫りにされた。こうして今日わが国におけるボランティア活動はその解釈までも拡大化・多様化しているのである。

#### 第四章「現代社会におけるボランティアの意味と位置づけ」

「無償の活動、禁欲、減私奉公、地道…。他者の幸せのために自分を犠牲にする『なかなかできない』活動。そんなイメージが残念ながら一般的だ。」(早瀬、1997, 2-3)

「本当にボランティアの心・ボランティアの意味をどれだけの人が理解しているかということ、どうも曖昧なままに使っている人が多いような気がします。」(永、1997, 12)

とあるように、正確な意味でのボランティアとはどのようなものであるかという問いに答えられる人はそうはいないようである。私たちはまずそれをよく理解して、ボランティアに向き合うのが重要ではないだろうか。ここでは現代的ボランティアの捉え方について考察したい。また、福祉行政と比較してボランティアの特徴を理解し、行政サービスとボランティアの関係性を考察し

たいと思う。

ボランティア (Volunteer)

「個人が自発的に決意・選択するものであり、人間の持っている潜在的な能力や日常生活の質を高め、人間相互の連帯感を高める活動である」と言われている(90年のIAVE総会における「世界ボランティア宣言」より)。また、ボランティア活動は、つぎのような理念によって語られることが多い。すなわち、自発性(自立性) 無償性(非営利性) 公共性(公益性) 先駆性(社会開発性)である。」(日本青年奉仕協会、1995)

このようにボランティアを伝統的に支えてきた原則として、自発性、無償性、公共性、先駆性の四つがあげられる。この中でも、とりわけ自発性がボランティアの核心であると言われている。

現代社会は社会問題の質や対応への期待も大きく変化しており、ボランティアも影響を受けている。国はボランティア振興策を打ち出して、行政施策やサービス供給にボランティアを取り込もうとし、民間では自主的で多様な取り組みが推進されるべく、NPO(民間非営利組織)が法的に位置づけられた。こうした動きは阪神・淡路大震災後に起こったものであり、ボランティアの本質をも変えつつある動きといえる。無償性や財源の独立性、先駆性、継続性などは、すでに状況的に純粋に保つことが困難となり、必ずしもボランティアの本質ではないという見解も増えている。公共性につ

いても、公共的利益に資することは当然としても、社会が複雑化するなかで何が公益かさざまな立場があり、見えにくくなっているのである。その中で、これを失うとボランティアの本質を失うとして強調されるのが自発性である。最大の本質として残るのは、個人の自由な意志による自発的な社会活動であるということなのだ。これはボランティア活動の数々の美点がこの点から発していることからわかる。「ボランティアが個人の意志や関心を源泉とする以上、ボランティア活動の形態はさまざまよく、むしろ多様であることが望ましい、つまり、ボランティア活動は多様で個別的で流動的で変化に富んだものなのである(福永、2000, 18)」と福永が言うように、いまやボランティアそのものは、良いことでも立派なことでもない自発的行動なのである。

ここで前述したNPO法で挙げられている特定非営利活動としての12項目を紹介する。

1. 保健、医療または福祉の増進を図る活動
2. 社会教育の推進を図る活動
3. まちづくりの推進を図る活動
4. 文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動
5. 環境の保全を図る活動
6. 災害救援活動
7. 地域安全活動
8. 人権の擁護または平和の推進を図る活

動

## 9. 国際協力の活動

10. 男女共同参加社会の形成の促進を図る活動

11. 子どもの健全育成を図る活動

12. 前各号に掲げる活動を行う団体の運営または活動に関する連絡、助言または援助の活動

そして宗教的目的、政治的目的を主とするものは除外するとある。

このように活動領域も社会福祉だけでなく、教育、国際協力や環境保全、平和運動や人権擁護活動など、社会のさまざまな課題に対して取り組まれるのである。

「お金や物を寄付することなど慈善(charity)に属する活動や、有償あるいは互酬性のものまでボランティア活動に含める傾向もあります。また逆に無償であっても、それほど必要とされていないことを自己満足で行う場合もボランティアということが多くなっています。」(中川、2000, 12)とあるように、一昔の日本のボランティア観では考えられないほどボランティアの概念は広がってきているのである。

このようにボランティア活動は自発性を本質としたさまざまな活動であるといえよう。自発行動を普段の暮らしのなかで社会に向けて開いていくのである。ただ活動する際に、ボランティア精神を支える理念が不明確であることが多いため、偽善者のように見られたり、ボランティアをしている本人が気恥ずかしい思いをしたりするので

はないだろうか。ボランティアそのものは良いことでも、立派なことでもないのである。良いことであるかどうかということは、活動の内容で決まるのだ。その内容の評価には社会的なもの和个人的なものがある。社会的な評価と個人的な評価が食い違うことはある。しかし、それは自らが自己のボランティア理念によって活動を吟味し評価することが重要なのである。

それでは、福祉の需要に伴う行政サービスとボランティア活動について考えたい。

ボランティア活動は、特定の相手のために、できる範囲で思いのままに援助ができる。自分の心に正直であることから責任は自分にあるが、公序良俗に反しないかぎり自由である。また阪神・淡路大震災での活躍でも注目されたように、行政を上回る機動性や柔軟性を持っている。

行政サービスは、全体を考えなければならぬため、公平性に縛られる。しかし、長期的に継続できるという安定性がある。公平性に縛られるという点が大きな特色であり、どこからも批判のでないようなプログラムの作成、自分の気持ちは抑え全体に奉仕する心構えなどが必要とされる。また、「思いつき」による独創的な活動も危険なものとなる。これは行政サービスが制度という一律なサービスだからである。

この2つの活動は「主観的」と「客観的」という点で分けられる。ボランティア活動は、主観的要素が中心であるから、阪神・淡路大震災のような大事件が起こると、

人々の関心が集中し、どうしても活動に偏りが生じてしまう。一方、公平性を中心とする行政サービスは、偏ることがない。行政サービスの良さは公平性にあるともいえるのである。立場の違いに関係なく、どのような人でも平等にサービスを受けることができるのだ。こうして考えると、双方一長一短であり、両方ともなくてはならないものであろう。ボランティアは行政サービスの補完ではなく、独自の役割を持っているのだ。

それでは、前述した行政主導のボランティアについてである。今まで述べたようにボランティアの本質は自発性にある。それは行政のお膳立てがあっては、失われてしまうものなのかもしれない。しかし、行政主導であっても、体験学習や最初のきっかけ作りと考えれば有効ではないだろうか。

図1からわかるように、希望する活動内容では、活動形態も、活動の対象も「特にならない」が最も多いのである。これでは、「何かしたい」という思いだけで終わってしまう場合が多いだろう。ボランティアの斡旋としてすでにあるボランティアセンターの補完として、体験的に「知る」程度であれば、行政主導のボランティアを利用するというのも良いのではないだろうか。

第五章「私の感じたボランティアというもの」

以下は、子ども劇場での活動後期にボランティアを模索しながら考察したもので、私のボランティア観の変遷の途中経過となる。

私は子ども劇場で「ボランティア」をしているつもりであった。しかしそれは実行委員になり深く関わる前のことである。私の考える「ボランティア」の原点は奉仕であった。何かを与えることであり、自己犠牲的なものである。大なり小なり犠牲のもとに成り立ち、提供する側は損をしたり、採算に合わないことを仕方なくしているものだと考えていた。ここで、ボランティアを自己犠牲的にしてしまう人としらない人を分けるものは正義感であり、「ボランティア」をする人は正義感の強い「いい人」というイメージがあった。

私が子ども劇場でしてきたことは、ハタから見るとボランティアに分類される。だが、私の中でボランティアと呼ばれて納得できたのは初期の頃のみである。仕方なくやっている部分があったが「社会的にはいいことである。損はするが無駄ではない」といったところであろうか。しかし、活動を続けるうちに思うようになったのは、私は損はしていないということである。時間と労力は費やしたが、得たものはもっと大きいものだった。お互いにギブアンドテイクをしたようなものである。私は提供者で

はなかったのだ。実は子ども達と対等な立場で取引をしていたのである。

そして私は、数あるボランティアと呼ばれるものは、やってる本人にとってはボランティアではないのではないかと考えるようになった。現に子ども劇場の人はボランティアとは思っていない。もしその中にボランティアというものが存在するのならば、それは慣れるまでの期間を指すのではないだろうか。初めの一步を踏み出し、得るものもあまりない状態で続ける段階である。ある意味、奉仕、いや、投資なのかもしれない。私にとって「ボランティア」と思えたのはその時期のみである。卒論があったため、辞めるわけにはいかないという思いもあったが、私はその段階を過ぎた。入会から約4ヶ月ぐらいだろうか。それはちょうど実行委員として活動していた頃に当たる。

私は子ども劇場を「ボランティア」だと思って入会した。しかし、今は私が子ども劇場でやっていることを「ボランティア」だとは思わない。私はただ子どもと戯れていただけである。特別なことはしていない。

なぜそう思うようになったのか。それは子ども劇場での活動が「奉仕活動」ではないと思うようになったからであろう。私は時間や労力と引き替えに、いい人間関係、いい人生経験ができたと思っている。物々交換をしていたのだから奉仕ではないのだ。私の中では「ボランティア=奉仕活動」として捉えられている。したがって、子ども

劇場での活動は奉仕活動ではないと考えられる以上、「ボランティア」ではないと判断されるのである。

それではなぜ第三者にボランティアと呼ばれてしまうのだろうか。多くの第三者は活動の内容しか見ない。私がそうだったように、金銭に置き換えられる価値のみを見てしまうため、「奉仕活動＝ボランティア」と捉えてしまうのではないか。いい経験というものは経験者以外にはなかなかわからないものである。この捉え方も、ボランティアという言葉が独り歩きしてしまっているために起こるのであろう。言葉と言語の意味はある程度知っていても実状はわからないのだ。

私のボランティア像は今、変わりつつある。しかし、まだ元来あった「ボランティア＝奉仕」のイメージが払拭できていない。「ボランティア」というものは継続していくことでこうした「ボランティア」意識がなくなるものではないかと私は考える。

#### まとめ

これまでの子ども劇場での体験をふまえ、私はこのようにボランティアを考えた。しかし、本稿を制作するにあたり、多くのボランティアの在り方に関する文献、資料に触れることによって、これまでと違うボランティアの捉え方をするようになった。ここからは私の中で芽生えた新たなボランティア観についてまとめたい。

日本人の多くが考えるボランティアは奉

仕活動というイメージが強いようである。確かにボランティアにはそういった一面もあるのだが、本質的には正しく捉えているとは言えないだろう。ボランティアの本質は自発性であるから、奉仕と捉える日本人の感覚とはズレがあるのである。奉仕と捉えることから起きるイメージから、「ボランティアは善行である」と思われがちであるが実はそうではない。

「アメリカ南部の産婦人科病院の前には二つのボランティアグループが対峙しているという。片や私生児となっても、ともに世話をするからと人工妊娠中絶を思いとどまらせようとするグループであり、片や産む産まないを決める権利は女性自身にあると無事に女性を病院に誘導するグループだ。どちらも根本的には女性の幸せを願っているのだが、よって立つ価値観が異なり、結果として激しく対立することになる。」(早瀬、1997、13)

この双方はボランティアグループであり、どちらも「善行」という枠に縛られていない。自発的な活動であるから、彼らを満たすのは自己満足しかないのではないか。

私は以前、ボランティアを否定的に捉えていたが今では肯定的にも否定的にも捉えてはいない。かつての批判は「善行ならば」という前提の上に成り立つ批判であったからである。金銭的な対価がないものであるから、自己満足なくして、ボランティアは続かないだろう。批判した内容もボランティアの一面として考えている。ボランティ



アをしている本人と相手にとって満足できるものであれば、公序良俗に反しない限り問題はないのである。本人にとって自己満足的な活動であるが、あとから周囲の評価のひとつとして、「偽善」と捉えられる場合がある。しかし、社会的に正しいという評価も後に付随するのである。結局、本質として残るのは自発性の結果として期待する「精神的充足＝自己満足」ではないだろうか。ボランティアは社会的に開かれた自己満足を求める本人本意な活動であると私は考える。このボランティア観のもとに考えると、子ども劇場はボランティアであり、私はボランティアをしていたのである。

#### 参考文献一覧

十島村役場 1995 「鹿児島島の島」『トカラ』チクマ秀版社

鹿児島市子ども劇場連絡会編・発行 1999 「子どもげきじょうごあんない」

馬場和子 1996 「子どもの文化を育てる船橋子ども劇場」『子どもの地域生活と社会教育』(姥貝荘一編 1996所収) 学文社

永六輔 1997 「あがべ・ボランティア論」光文社

中川義基 2000 「現代社会とボラン

ティア」『ボランティア - いきいきと生きる』(相澤譲治、福永英彦編 2000所収)相川書房

早瀬昇 1997 「ボランティア活動とは」『基礎から学ぶ - ボランティアの理論と実際』(早瀬昇編 1997所収)中央法規出版 日本青年奉仕協会編・発行 1995 「ボランティア白書 1995」

福永 2000 「ボランティアの意味と原則」『ボランティア - いきいきと生きる』(相澤譲治、福永英彦編 2000所収)相川書房

航薫平 2000 「気がついたらボランティア」学事出版